

## 序

近年、石造物研究は急速に歴史学における重要性を増している。編者が学生生活を過ごした一九九〇年代後半は、まだ石造物を卒論とする学生など数えるほどで、数少ない歴史考古学を学ぶ学生の中でもさらに少数派という状況だった（もちろん編者も卒論は土器であった）。しかし、それから二五年を経た今、石造物研究は考古学のみならず文献史学、民俗学、美術史学、さらには地質学、地球物理学を巻き込む総合分野にまで成長し、歴史研究に欠くことのできない対象となっている。こうした成長の背景には、一九九〇年代以降の歴史学の総合化があることは言うまでもない。九〇年代から二〇〇〇年代にかけて意欲的に進められた学際研究は、学融合という用語をも生み出し、それまでにない列島像、歴史像を紡ぎあげたことは周知のとおりである。研究史における輝かしい功績は否みようもないが、その反面、それぞれの学問領域における方法論的問題や、一次資料に関する見解の相違点などの課題が置き去りにされたまま、応用研究への参加が重視され、基礎研究分野の空白が生み出されたことも否めない。学生たちの卒業論文課題に基礎的研究が減少していることを感じた大学教員も少なくないであろう。

こうした課題は、銘文等から歴史事象や人物と結び付けやすい石造物においても例外ではなく、編年論や分布論といった考古学的基礎研究が不十分なまま他分野との連携研究が進んでいる。本書はこうした現状を踏まえ、石造物研究を考古学研究の立場からどのように展開してゆくかという課題に取り組んだものである。編者が本書で目論んだのは、考古学の王道ともいえる技術論から石造物に取り組むための視座と方法の提示である。

第一部では日本中世採石加工技術の特質を明らかにするため、古代から近世初頭にかけての採石加工技術を俯瞰的

に概観した。廣瀬論文では律令制成立期における石材利用形態の変化と技術の確立について論じられている。なかでも古代における採石加工技術に矢穴技法が用いられない理由を、半島からの技術導入期である六世紀末から七世紀初頭は、半島においても切石利用が未発達で矢穴技法が一般化していなかったから、とする点は、矢穴技法空白の理由に関する現状唯一の説明として魅力的である。

佐藤論文では全時代の採石場遺跡を、基本技術の種類を元に類型化したうえで、中世採石加工技術の歴史における最大の技術画期である矢穴技法の導入について整理、その故地と考えられる中国浙江省周辺採石場遺跡の技術体系と比較することで、日本における鎌倉期の技術移入が、寧波周辺の技術体系そのものの導入ではなく、一部の技術が小規模に導入され、独自展開したものであることを指摘した。さらに硬質石材加工技術の基本技術である矢穴技法について、その定義と導入画期を検討したうえで、十二世紀末から十三世紀における矢穴技法の導入と宋人石工の關係について考察を行った。

坂本論文は鎌倉期の矢穴技法導入から近世城郭石垣石材採取に利用される矢穴技法までを通史的に捉えた。そこでは鎌倉期の先Aタイプ矢穴が、中世後期の多様性を持つ古Aタイプ矢穴を経て、文祿期の肥前名護屋城割普請を通じて変革を受け、慶長期の公儀普請によつて標準化されるという流れが描き出されている。こうした城郭矢穴成立過程が明確化された今、次に求められるのは中近世移行期における石造物矢穴が城郭矢穴の変化とどのように対応しているのかを明らかにすることであり、新たな研究の展開が期待される。

山口論文はこれまで日本で知られていなかった中国における採石技術について、具体的事例を紹介している。佐藤論文では日本中世採石加工技術の起源を中国に求めつつも、その部分移植に留まるとしたが、山口論文にみる採石加工技術は日本中世のそれと大きく異なることが明らかであり、今後その意味が問われてゆくことであろう。

第2部では日本中世における採石場遺跡の具体的事例とそこにみられる特質を明らかにし、併せて採石加工技術研

究の方法論的課題を検討した。

松田論文では豊富な採石場遺跡を有する香川県を中心とした採石場遺跡の実態を報告している。香川県では中世から近世に至る多様な凝灰岩採石場遺跡が残されており、年代決定の難しさはあるものの、概ねその変遷を追うことができる。論文の中では近世の採掘について、一部中世との技術的連続性が確認できるとするが、こうした連続性と中近世移行期に採石場遺跡の形態が大きく変化する点をどのように考えてゆくべきか、投げかける問題は大きい。

原田論文は九州全域の石造物石材を整理したうえで、中世石造物の石材採取について言及する。九州における採石活動については、これまで『国東半島の石工』において紹介されている豊後高田市田染地区の近現代採石の印象が強く、掘割技法が基本技術の印象があつたのだが、実際には中世に遡るこの技法は確認できず、中世採石の基本技術は採取型であるとのことである。この点は掘割技法の展開過程を考えるうえでも重要である。また、溝状矢穴の存在は、九州における独自の採石技術の存在をうかがわせる。編者は九州には独自の大陸とのチャンネルがあり、畿内とは別系統で採石技術が移入されていた可能性を考えており、今後の類例増加と年代推定可能な資料の発見が待たれる。

第2部では本来日本各地の採石場遺跡の様相について俯瞰的に検討したかったのであるが、編者の力量不足のため四国と九州に留まつてしまった点はお詫び申し上げたい。しかし二論文で明らかになった事実は、今後全国の採石場遺跡を分析するうえで大きな足掛かりとなるであろうことを確信している。

第2部では採石加工技術研究の方法論についても取り扱った。高田論文は矢穴そのものを考古学的に扱う中で、矢穴分析に重要なのはばらつきが許容される矢穴口長ではなく、矢の効果が反映され、厳密な寸法規定が存在する矢穴幅であることを明らかにし、石割実験を通じて矢穴幅と矢の効果点の関係を整理した。先行研究が形態論に偏重する中で、機能論に着目した視座は非常に興味深い。また、矢穴のシリコンによる型取りや三次元計測は、採石場遺跡の調査・記録方法として有効である。今後廉価で手軽に利用できる方法の開発が望まれよう。

第1部・第2部では採石技術を考えたのに対し、第3部では石材加工技術に焦点を当てた。磯野論文では緑泥片岩製板碑の製作過程を復元し、さらに板碑及び緑泥片岩採石地に残る矢穴を悉皆的に集成したうえで、その形状分析や細部観察を通じて矢穴とされるものの特性を整理した。本論文で問題点が明記されているように、本書を手にとられた方は、「矢穴」という用語が秘める様々な視点に気付かされるであろう。本論文のような基礎作業を通じて技術と用語の関係整理を進めてゆくことこそ、本書の狙いの一つである。

村山論文では板碑製作に際して多用される、いわゆる押し削りに注目し、板碑製作に関する一連の技術体系にこの技術を位置づけたもので、考古学の王道を歩むものである。押し削りという単独「技術」が、複合剥離技法という「技法」を構成してゆくプロセスが明確に論じられており、技術形態論的板碑研究の重要な問題提起となろう。こうした技術の完成が板碑の数量増加・定型化とどのような関係を有しているのか、今後の展開が気になるところである。同様の視点を五輪塔で展開したのが小野木論文である。ここでは美濃地域に広く展開する硬砂岩製五輪塔未製品の分析を通じて、五輪塔製作技法の復元を行うが、編者が注目したのは、リング、フィッシャーを記入して打点の大きさを分析項目とする、石器研究の観察視点を石塔研究に持ち込んだ研究方法である。以前、縄文時代の石器研究を専門にしていた大学の後輩が「安山岩製板碑の背面分析って、石器の技術形態論が使えますよね」といった言葉を一笑に付してしまった記憶があったが、同じ石を素材とする石造物研究において、石器の研究方法が利用できないはずはないのである。本論で試みた分析視点は今後幅広く展開してゆくことが予想される。

最後に岡本論文では、これまで考古学的な方法を中心に検討を行ってきたが、思い切って考古学的な視点で、文献史料にあらわれる採石加工技術を分析していただいた。岡本論文では金石文に見える石工達の活動を整理したほか、南都諸社にかかわる史料に石関係造作の記事を見出し、その主体について検討を行う。興味深いのはこれまで一体のものと考えられてきた石材加工を行う集団と石積みを行う集団が、唱聞師と石切方として別々に捉えられていたと